

AUDIO BASIC

CD特別付録

ピアノの限界に迫る!

「板橋流
ジャズピアノ
入門」

2009 AUTUMN vol.52
オーディオ・ベーシック
特別定価 1,500円



秋の注目モデル
新着先取り
情報

日本ブランドアンプの
底力(第二回)

プリアンプの
音の支配力を聴く

深夜の小音量
再生に涙する

マイケル・ジャクソンを語れ!

ミドルクラススピーカー
ライバル対決!?

十四番勝負

驚くべき価値を持つ
プリマルーナ製品に
悩ましい魅力が加わった

ロンドン
からの
手紙 volume 17



Letter
from
London

Text by Ken Kessler
Translation by Kazuo Harashima



プリメインアンプ

AH! プリマルーナ DiaLogue Two

¥399,000

SPECIFICATIONS

- 出力：38W+38W (UL接続)、18W+18W (三極管接続)
- 入出力端子：フォノ (MM) 1 系統、ライン入力 4 系統 (RCA)、ホームシアターダイレクト入力 1 系統、録音出力 1 系統、スピーカー出力 1 系統 (4 Ω、8 Ω)
- 入力感度/インピーダンス：270mV/100kΩ (ライン)
- 使用真空管：12AX7×2、12AU7×2、KT88×4
- 消費電力：250W
- 寸法/重量：405W×210H×385Dmm/30kg
- 備考：リモコン付属。EL34搭載でフォノカードがオプションのDiaLogue One (¥346,500) あり
- カタログ請求先：〒101-0021 東京都千代田区外神田 2-10-8 富士ビル 1F
AH! 東京秋葉原店「カタログ請求・AUDIO BASIC」係 TEL03-6206-0006

新たな価格競争に 向けた一層の努力

これまでに発売されてきた「プリマルーナ」の Prologue (プロローグ) シリーズを聴いて分かったことだが、どの製品とも驚くべき価値を持っている。その理由は1. 国製であること、2. ヨーロッパのスタンダードに合致していることだ。プリマルーナ製品が持つ低価格のエントリーレベルの真空管アンプとしての信頼評価は確立した感があり、きちんと設計された機器のハードウェア生産において、中国は世界のどの国にも負けない競争力を持つに至ったことを証明したと感ずる。そして、Dialogue (ダイアローグ) シリーズの登場で、「プリマルーナ」は新たな価格競争に向けて一層の努力を払っている。

価格というポイントから見ると、Dialogue 2 はアンプ購入のために2000ポンド(約32万円)を留意しようとする人たちのために魅力的な内容を持っている。1999ポンドという前の製品と同じ価格設定により、中間層の消費者を刺激することだろう。それに加えて、アダプティカル・オートバイアスの導入である。さあ、これでより多くの人を喜ばせたり、悩ませたりする魅力が整ったことになる。

これは手動バイアス調整なしに出力量を取り替えることができる最初

のアンプというわけではない。多くの従来製品は、ユーザーの好みに応じて、出力管を取り替えることができる。例えば、オーディオバルブのアンプは、KT88、6550、EL34を、同じチャンネルの中で取り替えることも可能になっている。

モードによる 音質の違いは 小さくない

「プリマルーナ」は、その出力管取替を Dialogue 2 の特徴として、全面に押し出し、さまざま

可能性を引き出そうとしている。

会社によると、試聴のために提供したKT88とEL34のほかに、KT66、KT77、それに6550なども差し替えることができるほか、出力管の動作を三極管接続にしたりウルトラリア接続にしたり選択することができる。そして、この選択をリモコンでいとも簡単に切り換えられる。誰でも音楽を聴きながら、リスニングポジションから好きなモードを選べる。ウルトラリアは赤、三極管接続は緑のLEDが表示される。そして、モードによる音質の違いは小さくない。

というわけで、二組の出力管があるとする、モードを変えて試聴するのに4倍の時間がかかることになるわけだが、どのモードも、聴きこたえが十分なほどの大きな違いがある。例えば、三極管接続は音に暖かみが増す、というようにそれぞれのモードから多様な結論が出てくる。とは言っても、その4つの音質をチェックする過程では、出力の違いは、それほど問題にはならなかった。

三極管接続と UL接続を リモコンで選択可能

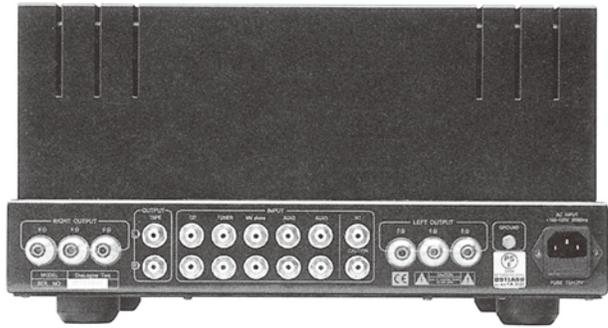
ここで一つ発見したことは、「出力管選び」よりは「三極管 vs ウルトラリア」のほうが難しくなく、ということだった。つまり、音源の

立派な付属リモコン。三極管とウルトラリアの切り替えはリモコンでしかできない。



レコーディングの違いで三極管を選ぶか、ウルトラリアを選ぶかは、全く簡単でほとんど瞬間的に決めることができる。それに、「三極管 vs ウルトラリア」は、ユーザーに出力管選択の能力を高めさせ、処理能力を増進させる、という側面も持っているのではないかと思われる。つまり、「プリマルーナ」のリモコン操作は、リスナーの遊び心を刺激することに役立つということなのだ。それでは、その辺をもう少し深く追求することにしよう。私はこのアンプを試聴するため、当初はLS3/5AとPMCDBLiを選んでいた。だが、時間が経つにつれて、私の試聴の大部分はソナスラペールのCremona Auditor Elipsaになってしまった。そして、このスピーカーでは、特に受ける信号を力強く、首尾一貫して再生するという面で、KT88のほうがEL34より勝れていた。反対にLS3/5Aでは、私の好みとして

Dialogue 2 のリアパネル。



ケン・ケスラー氏は20年以上もハイエンド・オーディオについて執筆活動を行ってきた。生まれはアメリカだが、現在は英国に住み、英「Hi-Fi News」誌の編集協力者としてさまざまなオーディオ記事を寄稿している。彼はまた、米「Stereo phile」誌をはじめとして、世界各国の数多くの雑誌にも執筆中。最新著に「McIntosh“...for the love of music...”がある。



Ken Kessler

BOX OUT

KT88 vs EL34

「ご自分の耳で決めてください」という「プリマルーナ」の指示に従い、KT88とEL34の「三極管 vs ウルトラリア」の両モードを試してみた。私は、音の暖かさとスケール感の点でKT88の三極管接続に軍配を上げた。とはいっても、私は、EL34のウルトラリア・モードにも、よりパンチ感と中立感の点で評価する。恐ろしいことに、ソナス・ファベルからPMCやLS3/5Aへ変わるたびにすべてが変わるのである。ということは、自分の耳で決めるときに、何の疑念も持たないで、スピーカーの選択から始めることだ。どんな気持ちを持っていたにしろ、スピーカーによって選択が変わる。ただ、私が残念なのは、今のところ、手元にKT77セットを持ち合わせていないことだ。

600 Word Verdict

結論だけを知りたい人のために

「プリマルーナ」は代表的なアンプ・メーカーに成長した。価値は群を抜いており、性能、出来、スタイル（特に真空管覆い部）は一級品の仕上がりである。それに加え、出力管交換に興味を示すオーディオ愛好家を虜にするだろう。大人が理解できる「プリマルーナ」は完成度、透明度、本物の持つ特性などで評価できる。すばらしい！



フロントの天面にあるインジケーターで、三極管とウルトラリアの切り替え状況が分かる。

はEL34のウルトラリア・モードのほうが良かった。このモードでは低音がよく締まり、ボーカルでは全体の音量が拡大した。LS3/5Aで聴く両出力管の三極管モードでは、中音域は暖かみを帯び、あえて言えば、ほとんど甘ったるいという印象だった。ジョス・ストーンがエレン・ペイジのように聴こえるというところで、それはそれで問題は無い。さて、「三極管 vs ウルトラリア」は、スピーカーに関してより、音楽に関しての影響が強いと思う。ハードロック、音源の大きなもの、パンチのあるベース（低音）に関しては、私はウルトラリアを選んだ。より柔らかい音源、ボーカルもの、アコースティック・ストリングスに

関しては、三極管接続を選んだ。これは、スピーカーでも出力管でも共通していた。

いぶし銀のような味のあるアンプ

さて、この後の試聴結果についてであるが、これからは、KT88だけを使用して、音楽に応じて三極管とウルトラリアに切り換えて行ってみた。出力管の選択とか三極管とウルトラリア接続に関係しないアンプの持つ本質的な特性／性格を探ることが大切であり、確認したかった。その結果だが、Dialogueは、より一段と洗練させた音質に仕上がっていた。そうでなければなら

翻訳者から

出力管をあれこれ取り替えたり、三極管接続にしたリウルトラリア接続に変えてみることは、真空管愛好家にとって、どんなにスリルのある経験であろうか？ それを、手元にあるリモコンひとつで瞬時に三極管とウルトラリア接続が選べる、とは夢のような話。ケスラーさんの解説からはっきりしたことは、どの出力管をどのように動作させようと、どれが最良かの答えは出ないということなのだ。その点は、ケスラーさんは個人の好みを大切にしている。音楽あり、スピーカーありの世界だという。しかし、こうしたアンプの出現で、スピーカー選びからはじめて、自分の耳を信用して、音楽を楽しむというもう一つの選択肢が加わったことを喜びたいと思う。（原島一男）

ないが。アナログ盤の優れたモノラル録音の中からコーン・フランシスの「Sings Jewish Favorites」などのボーカルものを聴いてみる。全体として感じられたのは、出力管とかセッティングに関係なく、「プリマルーナ」はボーカル・ソースから中音域に最適な豊かさを再現し、細部にニュアンスを与えるようだ。きつと、あなたもトリーヤあるいはジュリー・ロンドンの息づかいを聴きたくなることだろう。

それにしても、これはKT88の開放感を感じられるアンプである。三次元の立体的なスペースを再現しつつ、明解さと透明感を醸し出している。とはいえ、真空管アンプとして、最も開放感のあるアンプとは言えない。GRABAFやオーディオリサーチの清潔で華やかな明解さはないにしろ、いぶし銀のような味のあるアンプである。